

七点

③冬波や光る空母のカタパルト

増田 守

横須賀港には海上自衛隊の基地がある。ここは、米空母の寄港地でもある。前の大戦の惨禍と関係国の想いを考えれば当然であるが、我が国の憲法では専守防衛に徹している。改憲を唱える向きもあるが、勇ましいことはいくらでも好き勝手に喚くことができる。軍隊は無用の長物で有れば良い。空母は戦闘機の動く発進基地である。カタパルトはその象徴である。

③薄墨の筆流麗や寒見舞

岩野ヤエ子

敬愛する私の先輩は、若い頃は頑張り屋さんで、目指すものはなんでも物にしてしまう炎のような女性でした。英語が好きとなると通訳案内業試験にパスし、世界を案内するガイドとなり活躍しました。当時は、まだ珍しいフィギュアスケートにも挑戦していました。八十歳を超える今も、ピアノを習いシヨパンを弾いています。その方は、書道家でもあり、ある時から、手紙は、巻紙に筆文字で送ってくれるようになりました。昨年、喪中のため、年賀欠礼の葉書を送ったところ、いつものように美しい文字で私のことを慰め思いやる優しい手紙をくださいました。

六点

①懐に愛犬のをり寒の入

岩野ヤエ子

寒い冬になると、犬に暖かそうな布の服を着せて散歩する人をよく見かけます。頭を保温するためか、手拭いで頬かむりをさせた犬を見た時もありました。ある時、愛犬をマフラーでくるみジャンパーの中に入れて歩いている人見ました。目だけぱつちりと見えたワンちゃん。とても幸せそうでした。しかし、そうして歩いている飼い主の方がもつと幸せそうに見えました。

初夢や父の抑留模糊として

稲葉 幸

戦後七十年、戦時中・戦後のことを思い出しています。父は、終戦になったのに戻らず、昭和二十三年に復員して来ました。当時、「占い」が流行り、全て「この人は戦死している」とのことでした。ところが、二十三年五月、叔母宅に先に寄り、叔母と共に我家に帰って来ました。母と共に大喜びしたのでした。シベリアのイルクーツクに抑留三年間、マイナス四十度の地で、良くぞ頑張ってくれたと思います。しかし、医師の話ですと、「お父さんの血管は寒さでボロボロ」とのこと、五十二歳で逝きました。

五点

④半ばまで冬帽の呑む頭蓋骨

弘友 秀夫

寒さの厳しい時期に、町なかでニット帽を被った男性とすれ違いました。眉も隠れるほどに目深に被った様子がまるで、ニット帽が大きく口を開けて頭蓋を飲み込もうとしているように見えました。句から、冬帽子を深く被った様子、またそこから厳しい寒さまで伝われば、と思いました。

②来し方を刻む皺なり初鏡

藤本 友子

年の始めに鏡の前に立った時の心境です。年々深くなる皺に目を被いたくなります。しかし、この皺の一本一本に私のこれまでの人生が全て刻まれているのだと思えば、逆に愛しくも感じられました。こうして、人は少しづつ「若い」を受け入れて行くのでしょうか。

②旅人のための日溜り冬青草

恩田 才美

冬の箱根の一日旅。箱根は、路肩に雪を残し冷え込んでいました。堤の斜面を昼の日差しが照り返す一瞬、全身をあたためてくれるありがたさがありました。堤が好きです。寅次郎さんの、そして私の堤。人は旅人だから。

四点

①西に入る寒満月や透きとほる

岩野ヤエ子

近くの公園で行われている朝のラジオ体操会に参加しています。家を出る頃は、夜明け前でまだ暗かったのですが、公園に着く頃はすっかり明るくなり、澄んだ青空に変わっていました。その時、月がちょうど、西に沈もうとしていて、とてもとても大きく色は透きとおるような淡い「白藍」で、思わず、「わあ、きれい」と独り言ちしてしまいました。

①改元へ百二十日初日記

藤本 友子

最近、「平成最後の・・・」という言葉をよく耳にします。その意味で、私も今年の初日記は、心新たなる思いでした。世の中に不穏な空気が漂っている中、年号が改まったとしても、平和で穏やかで、災害のない日々でありますようにと。

あれこれの抽斗たのし冬籠

恩田 才美

転動に次ぐ転動でしたが、この横浜を終世の地とし二十余年。冬籠とはいえ終活のためのあれやこれやとなりましたが・・・。抽斗は単なる収納庫であるばかりか自分の過去世が詰まっているところ。又何年も開かずにしておいても安寧の拠所でもありました。遺品がそのまま静かに眠っている。何時のことかは忘れてしまっている物の数々。サイコロキヤラメルの空箱にカラカラ鳴る花種、ちびた鉛筆、お守り、ガラスペン、幼子が寄こしたメッセージカード。抽斗は玉手箱でした。

年迎ふ意気込みもなし酒の煙

京林 眞壽

年頭には、その年の抱負、計画がふさわしいとは思いますが、胃癌手術後、家族に禁酒を言い渡され、元旦に酒が飲める嬉しさに、この句を作りました。

冬ぬくし日差し背負ひて畑仕事

辻 幸子

農園を借りて野菜作りに励んでいる友人に誘われて野菜の収穫の手伝いをしました。その時のことを詠んだ句です。大根、白菜、ブロッコリーなど立派に育っていて、食べきれないほどたくさんいただきました。私にとってほんとうに久しぶりの畑仕事でした。